

優秀賞

高校生部門

北海道知内高等学校 3年

能代 心太郎

力の源

私が親元から250km離れて寮生活を始めたのは高校一年生の春だった。初めのうちは少し寂しかったが、すぐに慣れた。親元から離れることで、一人前になったような気持ちになつていった。毎日、部活動である野球の練習が忙しく、充実した高校生活を送っていた。

母と連絡を取るときは、たいていお金の工面だった。お小遣いをもらってはすぐに使ってしまう私は、ほしいものがあれば何でも母に頼んでいた。母はそんなわたしの願いをいつもきいてくれた。

あるとき、母の友人からこんな言葉を聞いた。

「お母さん、頑張ってるんだよ。私には絶対まねできないくらい。本当、すごいと思う」

母がどんな思いで家計をやりくりしていたのか、私は考えたことなど一度もなかった。二つ年上の兄は本州の大学に進学していた。兄と私への仕送りで、家計は厳しい状況にあつたのだ。必死に働いている母の姿が目には浮かんた。なぜか急に母に会いたくなつた。しかし、部活動の練習はほぼ毎日休みなし。250km離れた実家に帰ることなどできなかった。ただ、いたずらに時が過ぎていった。

高校二年生の年末、地元に戻ることにした。母が北海道の雪道を運転して迎えに来てくれた。地元である余市町へ帰る車中で私は母に尋ねた。なんでそんなに頑張れるのかと。日中は事務の仕事、夜は温泉の風呂掃除のアルバイト。休日も休まず働いている母。

「そんなの、あんたたちがいるからに決まってるでしょ。あんたたちがいないと頑張れませんよ」母はそう笑つて言った。私は泣きそうになつて窓の外に目をやった。母には一生かなわないと思つた。

野球の試合があると、母は遠方から駆けつけてくれる。私が打席に立つと、決まつて目をつぶつて手を合わせている。私もこの母がいるから頑張れる。歓声が母を笑顔にしてくれるよう、頑張る。思いっきり、振り切る。